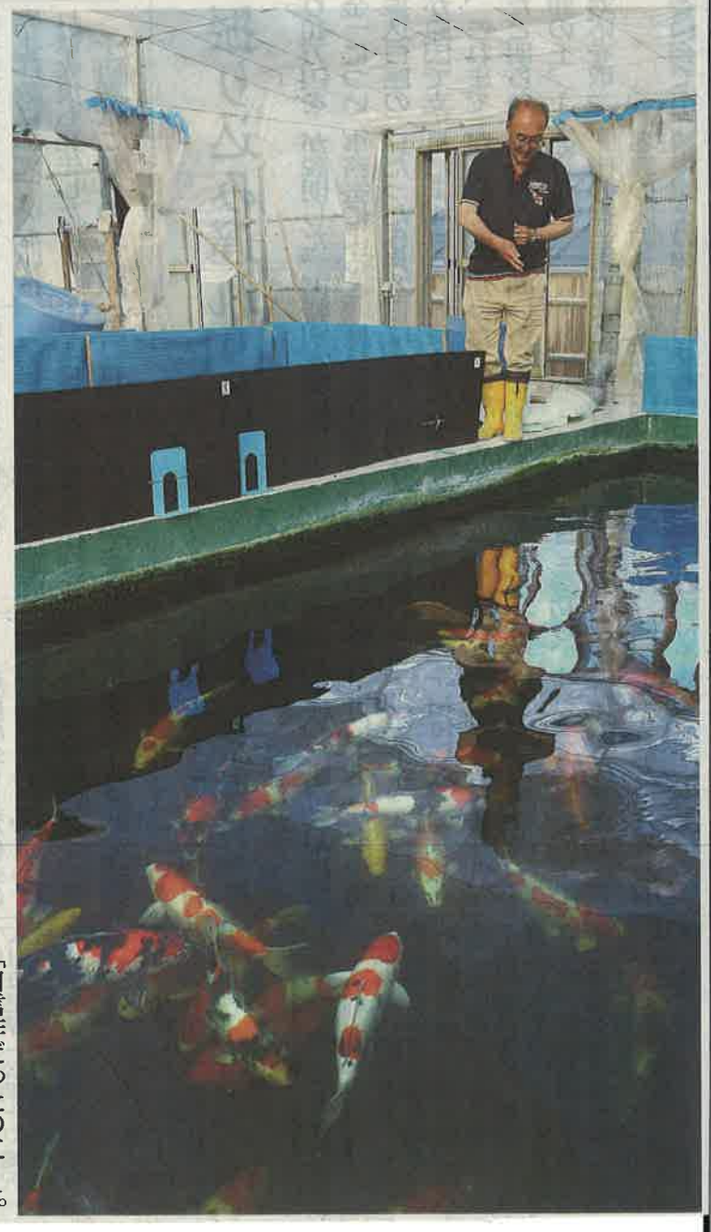
錦鯉に〝国境の壁〟

渡航制限で外国人バイヤー減少

輸送費も高騰、出荷ピンチ

中越地域 苦境に立つ養鯉業

新型ウイルス



新型コロナウイルスの感染拡大で錦鯉の輸出が激減し、錦鯉発祥の地である本県の養鯉業者が苦境に立たされている。海外との取引を主とする業者が多い中、渡航制限で外国人バイヤーの買い付けが減り、売り上げが落ち込んでいる。航空便の減少や輸送費の高騰で出荷も滞り、丹精込めて育てたコイの行き場が失われる恐れもある。

「自信作だったのに…」。5月末、長岡市滝谷町の錦鯉新潟ダイレクト取締役の大面富士雄さん(63)は声を落とした。いけすには、この時期に売りさばきたい2歳魚が残っている。

同社は錦鯉の生産、販売、輸出を手掛け、売り上げの9割を海外に頼る。例年ならバイヤーが頻繁に訪れ、出荷が伸びる時期だが、2月以降の輸出は1件だけ。3月の売り上げは前年同月比で8割減り、苦しい状況が続く。

最近は会員制交流サイト(SNS)を通じた情報発信に力を入れる。「何とか元気でやっていると、顧客に知らせたい」と懸命に前を向く。

年商の半分近くを春に稼ぐ長岡市山古志虫亀の丸重養鯉場の田中重嘉さん(40)は「大きな痛手だ。収入が入ってこないと持たない。リミットは秋だ」と危機感を募らせる。交配のシーズンを迎え、例年通りに人工産卵の作業を始めたが、この先の見通しは立たない。

全日本錦鯉振興会(小千谷市)などによると、新型ウイルスの感染が世界的に広がった2月以降、バイヤーが来日できなくなり、商談のきっかけになる品評会も中止が相次いだ。輸出も急減し、航空便の減少のため発送できても輸送費が数倍に跳ね上がり、送料の高騰を顧客が敬遠するケースもあるという。

振興会と県内主産地である長岡、小千谷の両市は4月、合同で県内95の業者を対象にアンケートを実施し、49社から回答を得た。「契約済みのコイを送れず、売り上げが出ない」「コイの維持費がかさむばかりだ」と切実な声が上がった。出荷先の約8割を海外が占めることも分かった。両市では、ほぼ全業者が悪影響を受けているという。

航空便での出荷は5月中旬以降、回復の兆しが見られるが、通常時にはほど遠い。振興会の西脇秀夫事務局長は「物流が戻っても以前の需要が戻るか分からない。富裕層以外の顧客も多く、景気の悪化で愛好家が離れないか不安だ」と話す。

長岡市錦鯉ブランド戦略室は山古志支所に職員を随時派遣し、業者の相談に応じている。新型ウイルスの感染防止に留意した「新しい生活様式」が求められる中、業界としても対応を迫られそうだ。戸田幸正室長は「品評会のやり方を含めて検討は必要。(感染拡大防止の)巣ごもり時に自宅の水槽で鑑賞できる小型魚の普及や、インターネットを通じた情報発信の強化など、生産者と協力して模索していきたい」としている。